

あるリックを背負っていた。重たいとしんどいとも言わないで、あどけない顔をして下ろしていたのが印象的である。

かんかん照りの太陽のもとで400人位が集まったのだろうか。海藻、貝、海浜植物を手に観察がなされた。少しまばらになってきた砂原で、先の女の子と弟が何か探している。どうしたのと近づいて尋ねると、ツメタガイがなくなったと言う。手助けのしようもなく、惜しいことしたなあと探すすべもないことを言い聞かせた。私はふと、自分の若い時の事を思い出した。50年前、この女の子のように幼稚であったが、これはと思つて手にした獲物を無くした悔しさが、腹に残ったことも幾つかあった。

御影師範学校に入学して、博物学を紅谷先生から教わった。その頃、東京から牧野富太郎先生が神戸へ時々来られていた。ある日、紅谷先生に引率されて摩耶山の植物採集会に行った。牧野先生の指導を受けた。ヤマジノホトトギスを手に、直接話し合った時の先生の笑顔を思い出す。その後も時々神戸に来られて、ハナショウブの話、秋の七草の話の講演会などで先生に接した。ある日、新聞で六甲山にクマザサ（ミヤコザサ）の花が咲いたという牧野先生の記事を見て清水君と六甲山へ向かった。住吉川を上った。長い長い道だった。目ざすクマザサの花は見つからないし、随分疲れてとうとう清水君は引き返してしまつた。私もあきらめた。住吉駅から列車に乗って自宅のある鷹取駅で降りる筈だが、ふと気がつくとき動き出した車窓の様子が違う。「あかし」という駅名板がみえた。寝ていたのだ。それにしても長い居眠りだ。見慣れぬ風景の中を列車は速く走る。飛行機から人が飛び降りた。後でわかつたことだが女の子の人がパラシュートで落下したのだそうだ。ようやくついた駅は大久保駅だった。駅員に事情を話して引き返した。

紅谷先生は引き続き細かく指導して下さる。ある日私の植物標本を鑑定して下さい。その時は先生が標本台紙に直接鉛筆で書いて下さい。その1枚にインモケツウと言うのがあった。その草は根元にたまがあって白い花が咲いていて葉は小さな葉面の縁に腺毛が生えていて毛の先は球になって粘液を出している、全体が20センチ程の草だ。その頃の私は未熟でこれを植物図鑑で確認する手段を取らなかった。頭にインモケツウがこびりついた。これがイシモチソウであるとわかつたのは大分後のことであつた。人に教えるときに文字を書いても、言葉で言つても間違いがあるものだなあとつくづく思った。それが紅谷先生であつたとは、いまだに忘れられないことのひとつである。

師範学校の3年になつたとき、私は陸上競技部で走り回っていた。オリンピックで金メダルをとつた三段跳びの南部忠平のコーチを受けて益々走り回つた。しかしそ

れがもとで乾性肋膜炎という酷い病氣なつて一年間療養した。当時は肋膜炎になつたものは再起不能と級友たちは噂した。私はその時から山歩きをして身体を鍛えようと志した。兵庫県博物学会の会員になつたのもこの頃のことだ。昭和8年か9年頃の事であつたろう。5年生の春びっくり仰天のことに会つた。徴兵検査の時の事である。私は甲種合格になつた。予想もしない事であつた。身体に自信ができた。このときから活気のある人生が始まつた。（はるな としお：常任理事）

槌賀安平先生

清水 淳

兵庫県立三原高等学校に槌賀研究室という一室がある。この部屋には、名物先生であつた槌賀安平（つちがや すへい）先生の生物教育に関する資料と、先生が採集された蘚苔類・貝類などの標本が保管されている。先生は、すぐれた生物学者であり、偉大な教育者であつた。

研究室の壁にかかかつてある博物学の3か条「勉メテ自ラ研究セヨ、精密ニ観察実験セヨ、正確ニ思考セヨ」の言葉は、明治42年（1909年）に広島高等師範学校博物科を卒業され、姫路中学で青年教師として教壇に立たれた時から一貫して主張されてきた先生の生物教育の哲学である。先生は、独特の槌賀式教授法でこれを実践され、「専門なきは退化す」といわれ、何事かに精通すればおのずから一般教養が生きてくると教えられた。教育の場は、奈良県・三重県へと移られたが、この間教えを受けた者の中に知名の士は多数である。

昭和25年（1950年）に故郷の淡路島に帰郷され、63歳になられた安平（あんべい）先生は、その後県立三原高等学校で16年間生物教育に携われ、槌賀式教授法は変ることなくますます磨きがかかり、片道5キロの道を毎日休むことなく歩き通され、生徒や沿道の人達から「おじいちゃん」、「安平（あんべい）先生」、「胴乱先生」の愛称で呼ばれる名物先生であつた。その間昭和30年（1955年）には教え子達によって槌賀研究室が建設され、退職後もこの研究室で生物の研究を続けられたのである。

生物学での業績も豊富で、大正3年（1915年）宇治山田中学に勤められていた頃、魚類学に専念され、志摩のシラウオの研究で、当時の魚類学の権威であつたスタンフォード大学のジョーダン博士の招きを受けた。その間に、大病丹毒熱に犯され、希望がみだされなかつたのが惜しまれる。しかし、その後先生は一生教育の道を歩まれる事になり、教えを受けた者達にとっては、このことは幸なことであつたというべきであらう。三重県在任時代には、三重の地質、三重の蘚苔類の分類と分布について研究された。淡路へ帰郷後は、淡路の貝類の分類と

分布、淡路の蘚苔類の分類と分布についてまとめられ、Entodontigae をはじめとする20種に余るコケの新種を発見されている。また、『貝類異同弁』、『蘚苔類異同弁』は、初心者の手引書としての先生の労作である。先生の採集された蘚苔類標本1,000種をはじめ貝類、カニ類、化石など貴重な標本が槌賀研究室に大切に保管されている。

先生の生物教育のモットーは、現在もそのまま通ずる哲学であり、我々は、この教えを受け継ぎたいものである。(しみず じゅん)

三浦佳文元会長の逝去を悼む

森本 義信

戦争は、5年間先生から教育現場や生物学の勉強を遠ざけた苦痛の歳月であった。昭和16年6月、第一東京市立中学校の食堂で昼食前の全校生徒に、あわただしく出征の挨拶をされ、郷里の兵庫県へと発たれた。間もなく、中国中部(中支)の前戦へ送られ、一兵卒として辛酸を舐められることになった。先生はあえて幹部候補生の志願をされなかったのも、御苦労はひとしお厳しいものであった。同じく兵卒として中国へ出征された御経験もたれるミズダニ類の今村泰二博士(茨城大名誉教授)とは、同じ境遇を共有した同年代の研究者として、互いに肝胆相照らす交流をもたれていた。昭和21年7月復員。折からご尊父病臥、近くで看病をせねばと、翌春、郷里に帰られ、母校の兵庫県立龍野高校で教鞭をとられることになった。

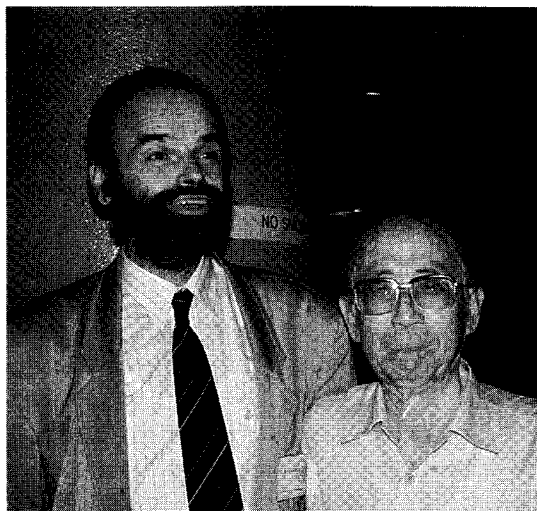
昭和24年頃、生徒が学校へ持参した井戸水の白いエビに関心をもたれ、25年の秋頃から龍野高校の南2キロ余りにあった相生市水源地の原水が地下水であったことから採集を始められた。これが、日本での組織的な地下水動物研究の幕開けになったのである。採集される動物の多くが、日本では初めてのもので、同水源地が正基準産地となった新種の数は次のとおりである。

ソコミジンコ類	13種
ケンミジンコ類	4種
ムカシエビ類	2種
ミズムシ類	2種
ミズダニ類	23種
ゲンゴロウ類	2種
合計	46種

また、先生が記載された新種の数は、次のとおりである。

ソコミジンコ類	1新属と14新種
ムカシエビ類	1新属1新種

先生は、龍野高校時代、学校にお訪ねすると、放課後は生物準備室で顕微鏡を覗いておられることが多く、殊



シュミンケ博士(左)と三浦先生(右)

に採集物のうち、ケンミジンコ類は個体数が多いにもかかわらず、1個体ずつ検鏡して種分けをしておられた。これらの結果は、残されていた先生の記録物から、別文の論文にさせていただいた。これは、地下水動物の季節的变化を述べる世界で初めての論文である。先生は研究が中断することを案じながら、姫路西高校へ教頭として赴任された。しかし、先生は見事に割り切って、校務を終えられたら放課後は、殆ど生物準備室に籠もって、ソコミジンコ類の研究に遅くまで取り組まれた。この間の研究物には未発表のものが多く、これらをかかえて加古川西高校へ校長として赴かれた。折しも、大学紛争の嵐が高校へも降りてきて、同校は県下でも激しい紛争の拠点校になっていた。先生は、それでも研究を続ける覚悟で校長室へ顕微鏡を持ち込まれたが、意にかなわず、荒れ狂う紛争に毅然として立ち向かわれた。

校長職に専念されること5年、先生が身をはって対決された結果、ご退職時には立派に正常化し、見違えるような学校に立ち戻ったのである。この業績が認められるところとなって、昭和47年秋、文部省から教育功労章を授与された。

さて、退職後は研究の再開とばかり、ご自宅に研究室を作られ、毎夜遅くまで、検鏡、作画、届いた文献の整理など、喜々として励まれた。研究室には多くの図版などが残されていた。これらの資料は、ソコミジンコ類の研究者、茨城大学の菊地義昭博士に、研究の継続を依頼した。やがて、同氏から、内外多くのソコミジンコ類の研究物が発表されることと思われる。更に、これからの研究者のためにと、日本のソコミジンコ類を後掲の論文著書目録のとおり、『中国/日本・淡水産橈脚類』と、『日本淡水動物プランクトン検索図説』にまとめられた。